

# アフリカの人々と名付け 37

## 「女の息子」、「薪の女の息子」という「父称」

小馬 徹

### 「父系の逆説」

ここ何回かの連載では、西南ケニアのキプシギスにおける女性の社会的地位の「構造的な高さ」を、名付けの観点から考察して来た。

キプシギス社会は、妻が婚入すると同時に夫の氏族に移籍して「擬似子称」を与える点で、通常の父系出自社会とは異なっている。しかも、一人の男性の妻たちが各々半ば経済的に独立する自分の「妻の家」(*kop-chi*)を営み、夫の遺産は息子の数に関わりなく「妻の家」の間で等分される—これを家財産制 (house-property system) と呼ぶ。つまり、女性は逸早く夫の氏族に編入されると共に、「妻の家」の主として自立することをもち期待されているのである。

キプシギスは、親族集団の成員権が父親から息子へと継承されるという出自原理によって編制されている父系社会である。だが、家財産制の慣行のゆえに、ある男性のいずれかの「妻の家」は嗣子(息子)がない場合にも、彼の遺産を相続して永続されなければならない。ではこの「妻の家」の応分の財産は、いったい誰にどのように相続される事になるのか。筆者は、この本質的で厄介な問題を「父系の逆説」という視角から論じた事がある〔小馬徹「父系の逆説と『女の知恵』としての私的領域」、和田正平(編)『アフリカ女性の民族誌』、1996〕。

### 女性同士の結婚

ある「妻の家」に嗣子たる息子がない事態に到るには、次のような幾つかの道筋があり得る。まず、(1)その妻が全く子供を産まずに、あるいは、(2)娘しか産まずに閉経した場合、次に、(1')婚出した娘以外の全ての子供が結婚前に死亡したり、(2')一人(またはそれ以上の)息子

が結婚前に死亡して娘だけが残った場合が考えられる。だが便宜上、本稿ではこれらもそれぞれ(1)、(2)に含める事にする。

こうした場合、閉経した老女(W)は、自分が夫となって若い女性(w)を娶る事ができる。キプシギスでは、これを「氏族の火を燃やす」、あるいは「大黒柱の傍らで娶る」と言うが、婚資の支払いも儀礼の細部も通常の結婚と異ならない。つまり正式の結婚であり、人類学が「女性婚」(woman-marriage)と呼ぶものである。

この女性婚には同性愛の要素は全く含まれておらず、「妻の家」の財産の円満な相続と老女の福祉とがその眼目とされている。だから、地域社会が老女の夫(H)に実施を促す場合が多く、Wに課せられる婚資の支払いを負担する義務がHにはある。wとなるのは、身体に障害がある娘か、未婚の母となった女性である。

### 近代化と「女性婚」

注目すべき事には、キプシギスでは女性婚が現在も広く普通に行われている。かつては、イニシエーションを終えた女性だけが出産を許され、それ以前に妊娠した女性はヤブで出産し、産まれた子供を最初の息をする(即ち祖霊が入り込む)前に窒息死させた。だが、植民地化以降この慣行が禁じられたので未婚の母が増え続けており、彼女たちも土地などの財産を得る最上の手段として女性婚を望んでいるのだ。

社会的には女性同士のカップルが夫婦の扱いを受ける場面があるが、日常的にはwはWを母、Hを父と呼ぶ。WがHの氏族から選んだ特定の既婚男性(K)がwの後見人となり、彼女の「妻の家」を訪れて経済的な援助を与えると共に、wとの間に子供をもうける。Kは、多くの

場合Hの別の妻、つまりWの僚妻の（長男でない）既婚の息子の一人である。生まれた子供たちは、wを母、Wを祖母、Hを祖父と呼ぶ。

しかし、Kは援軍を意味する「戦いの角笛の者」と呼ばれ、子供たちの父親とは見なされない。Kは「生物学的な父親」(genitor)ではあっても、「法的な父親」(pater)ではなく、子供の成長後（時には牛一頭程度の謝礼を与えられて）wとの関係を清算されるのが常である。

ところで、上記(2)の状況、つまり妻が娘だけを産んで閉経した場合には、女性婚とは別の仕方での「妻の家」の嗣子を得ることが許されている。それは、娘の一人を未婚のままこの「妻の家」に留め、彼女が産んだ男児に財産を相続させるものである。この場合、経過から予想される通り末娘が家に残るのが普通だ。

この制度には特定の名称がない。また、氏族外婚制のゆえに、この慣行では父親の氏族員から選ばれる「戦いの角笛の者」は存在し得ない。家に残った娘(D)は、父親の氏族員以外から性的なパートナーを自由に選ぶのだが、「戦いの角笛の者」とは異なり、その男性には一定の地位がなく、謝礼も与えられない。

#### 女性婚と父称

さてここで思い出して欲しいのが、イニシエーション後、キプシギスの男性は正式の名前である父称(patronym)を贈られる事である。その父称は、父親の幼名（より正確には、幼名の一つである粥名）Kip-Xから派生し、arap Xと言う形になる。例えば、父親の粥名がKiptoo（来客がある時に生まれた男児）であれば、父称はarap Tooとなり、Kiprop（雨降りの時に生まれた男児）であればarap Ropとなる。

では、女性婚や娘の一人を家に残す事によって嗣子を確保する場合、その男の子の父称はどうなるのか。彼らには生物学的な父親はいるが法的な父親はいないのだから、父称はあり得ないはずだ。彼らの母親の粥名（例えばCheptooやCheprop）に因んで「父称」（この場合は

arap Tooやarap Rop）を付ける事も許されない。それは父称が、親族集団の成員権などの権利の継承や財産の相続が父親から息子へと行われる父系社会の原則の文化表象だからだ。

女性婚の結果生まれた息子には、arap Chepkwony、またはarap Chebiosetという父称が与えられる。一方、未婚のまま家に残された娘の息子たちの父称はarap Bosubenとなる。前者はそれぞれ「妻の息子」・「女の息子」と、後者は「薪の女の息子」と訳せよう。これらの場合、同じ「妻の家」に何人の息子がいようが彼らの父称は一定である。そればかりか、家を問わず、誰であれ、上記のような集合的な名前しか与えられないのだ。その非個人的な性格のゆえからもそれらを擬似父称と呼ぶべきだろう。

「薪の女の息子」にはいささか注釈がいる。Bosubenとは上記のようにして家に残された娘を意味するが、この語はbo（××に属する、の意）とsubenの合成語である。subenは、家屋の中心に位置する炉（女性器の象徴）の火が夜間も絶えないようにくべられる太く大きな薪(subenet、男根の象徴)と、牛の代用財である山羊・羊の雌獣(subendo)を指す二つの名詞の共通の不定型である。つまり、彼女は「火」(mat)によって象徴される氏族の永遠の生命(mat)を受け継ぐ息子の代用であり、また牛の代用財たる山羊・羊の雌獣に相当する存在だという事なのだ。牛は、氏族外婚という民族の統合原理を介して氏族外の女性と交換される婚資財である。

このような擬似父称のあり方が象徴的に強調しているのは、女性婚などがあくまでも緊急非難的な措置である事、またその焦点となるWやDは女性として「妻の家」の権利を代表するのではなく、あくまでもその「妻の家」の息子の代理として、世代継承の仲介的な役割を果たすと考えられている事だ。父系のキプシギスの社会は、やはり「男の世界」なのである。

（こんま とおる 神奈川大学、社会人類学）